

Ⅲ 出土遺物

1 ガラス関連遺物

ガラス小玉鑄型 1 点とガラス片が出土している。

ガラス小玉鑄型は、調査区中央の炉跡群付近から出土した (Fig.14-1)。ガラスの表面張力を利用して小玉をつくる板状の土製鑄型である。小片であるが、表面に約0.6cm間隔で規則的に配置された約30個の小孔が残る。小孔は径0.4cm、深さ0.25cmの半球状で、各小孔の中央には径0.5mm以下の細孔があく。細孔に針を立てガラスを注入し、小玉に孔をあける。細孔は裏面までは貫通しない。器壁の厚さは0.95cm。雲母を含む緻密な粘土で基板をつくり、表面にやや脆く均質で細かい砂質の土を貼り、小玉の形をつくっている。表面の色調は黄褐色、裏面は橙褐色である。

また、濃緑色の微細なガラス片が南炭層やSB588の柱穴掘形から出土している。

2 冶金関連遺物

冶金関連遺物には、鑄型、坩堝、鑪羽口、砥石、銅製品、鉄製品、銀片、鉄滓などがある。南炭層、北炭層は土ごと取り上げて水洗し、微細な遺物まで採集した。特に、北炭層からは多量の遺物が出土し、冶金関連遺物全体の約4割(重量比)を占める。

A 鑄型

金属製品の鑄型 1 点が土坑SK609から出土した (Fig.14-2)。径約15cmの深皿形の鑄型外型で、内面は屈曲して口縁端部にいたる。湯口部分は残存していない。内面の底径9.0cm、屈曲部径10.6cm、上端の径14.2cm、深さ3.5cm。器壁の厚さは2.5cm。スサを多く含む粗い砂質の粘土で碗状に外形部分をつくり、その内側に0.5cmの厚さでキメ細かい砂質の土を貼って滑らかに整えている。外面の色調は黄褐色で、内面は灰色に還元している。坩堝を伴出しており、銅製品の鑄型とみられる。釘隠しなどの建築金具や仏具の鑄型の可能性がある。

B 坩堝

坩堝は、口径を復原できるものが40点以上あり、蓋が2点ある (Fig.15)。北炭層、区画溝を中心に出土した。内径10cm前後の小型品、内径13cm前後の中型品、内径15cm前後の大型品があり、このうち小型品が過半数を占める。小・中・大型品のいずれにも、緑青の付着した破

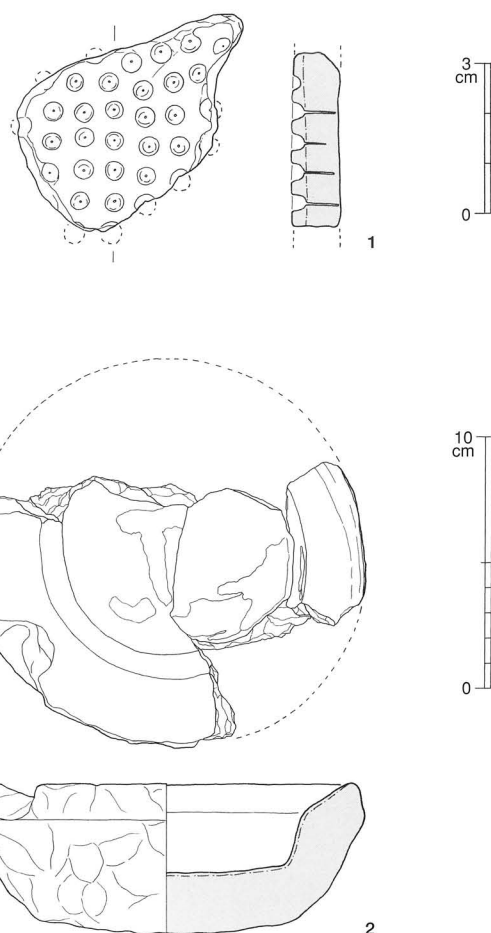


Fig.14 鑄型 1は2:3、2は1:3

片がある。

小型品(3~6)は次の3種類がある。底部の形状により、平底で厚手のもの(a類)と丸底のもの(b類)にわかれ、b類には、器壁がやや厚いもの(b1類)と薄いもの(b2類)がある。

a類(3・4)は、平らな底部から強く屈曲して直線的に立ち上がる。器壁が厚いぶん、容量が小さい。口縁部上面が平坦であり、蓋を被せて使用した可能性がある。内径10cm、深さ3.0~3.5cm、器壁の厚さ1.5~2.5cm。図示した以外の破片の中に、口縁の一部を半円形に切り欠いて注入口とするものがある。b1類(5・6)は、丸味のある底部から緩やかに湾曲して側面へ続く。口縁端部は丸くおさまる。a類よりも器壁が薄く、そのぶん容量が大きい。内径10~11cm、深さ3.5~4.0cm、厚さ1.0~1.5cm。図示した以外の破片で、口縁の一部を外側につまみ出して片口をつくるものがある。b2類は図示していないが、b1類よりもさらに器壁が薄く、器高の低い、

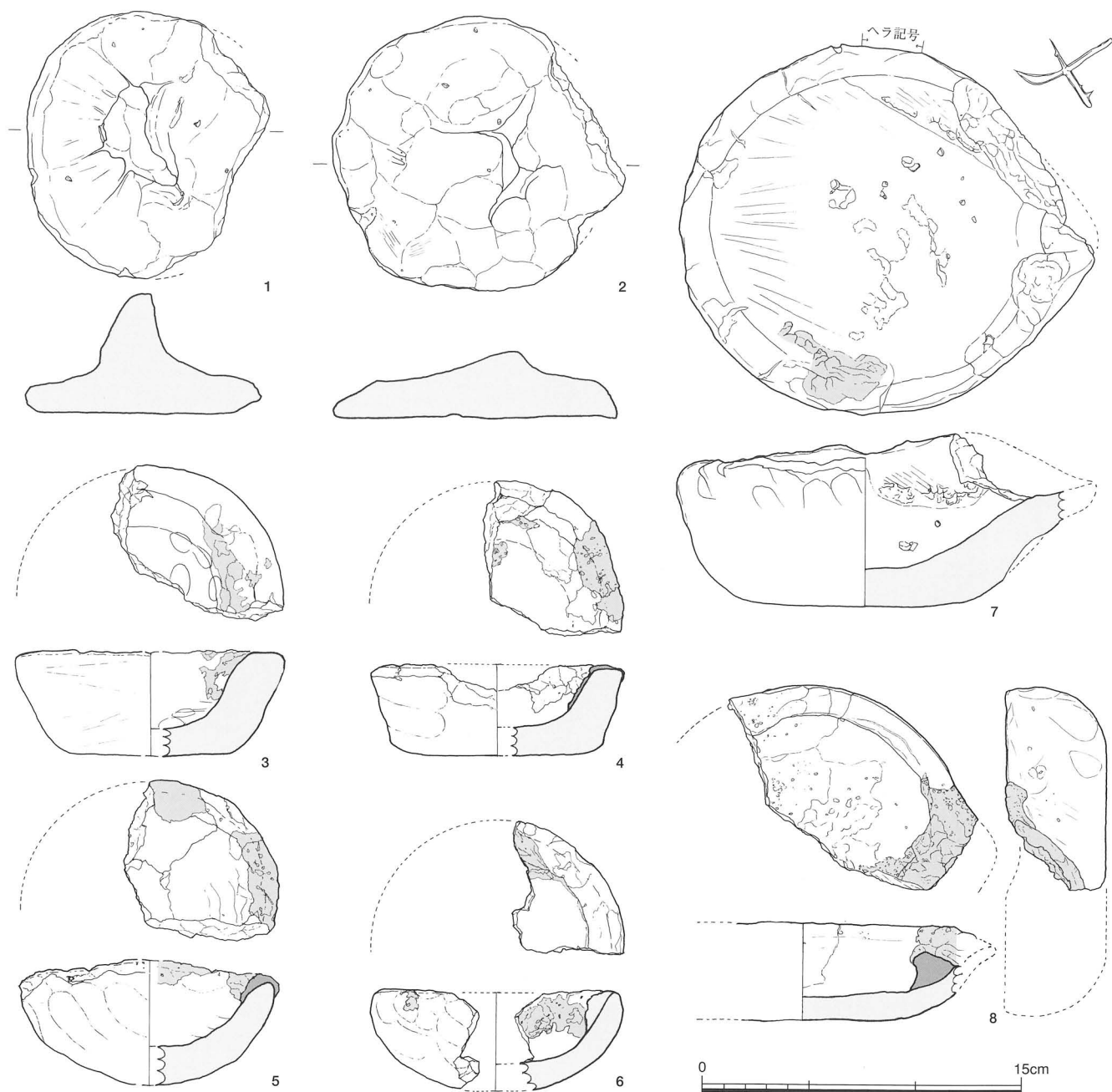


Fig.15 埴塙 1:3

浅い小皿形である。内径9~10cm、深さ約3cm、厚さ0.8cm。またこのなかで、強く被熱した痕跡のない破片がある。器壁の薄さや、不安定な浅い形状もあわせて考慮すると、金属を熔融する埴塙ではなく、熔融した金属を受けて鋳型に注入する「取瓶（とりべ）」として使用した可能性がある。

7はSK609付近のSD605出土の大型品。8はSK609から鋳型、羽口とともに出土した中型品。いずれも底部が平らであるが、小型品a類のように強く屈曲せずに、緩やかに湾曲して口縁部へと至る。口縁端部は丸くおさまる。またほかに、小型品a類と同じように口縁部上面が平らで、内径が少なくとも13cm以上の中型品がある。

蓋（1・2）は2点とも北炭層付近から出土した。不整な円餅形で、上面中央につまみがある。1は平面形がやや楕円形で径12.6cm×11.2cm、全高5.7cm。2はつまみが低く、径約13cm、全高3.3cm。平坦な台の上に粘土板において手捏ねで成形しており、表の全面に指頭圧痕が残る。胎土に粗い砂と雲母を含む。色調は橙褐色で、部分的に赤褐色に被熱変色している。鉍滓は付着していない。小型品か中型品の埴塙に被る蓋であろう。

C 鞆羽口

羽口は外径のわかるものだけで70点以上あり、北炭層と区画溝から多く出土した（Fig.16）。先端から元口まで

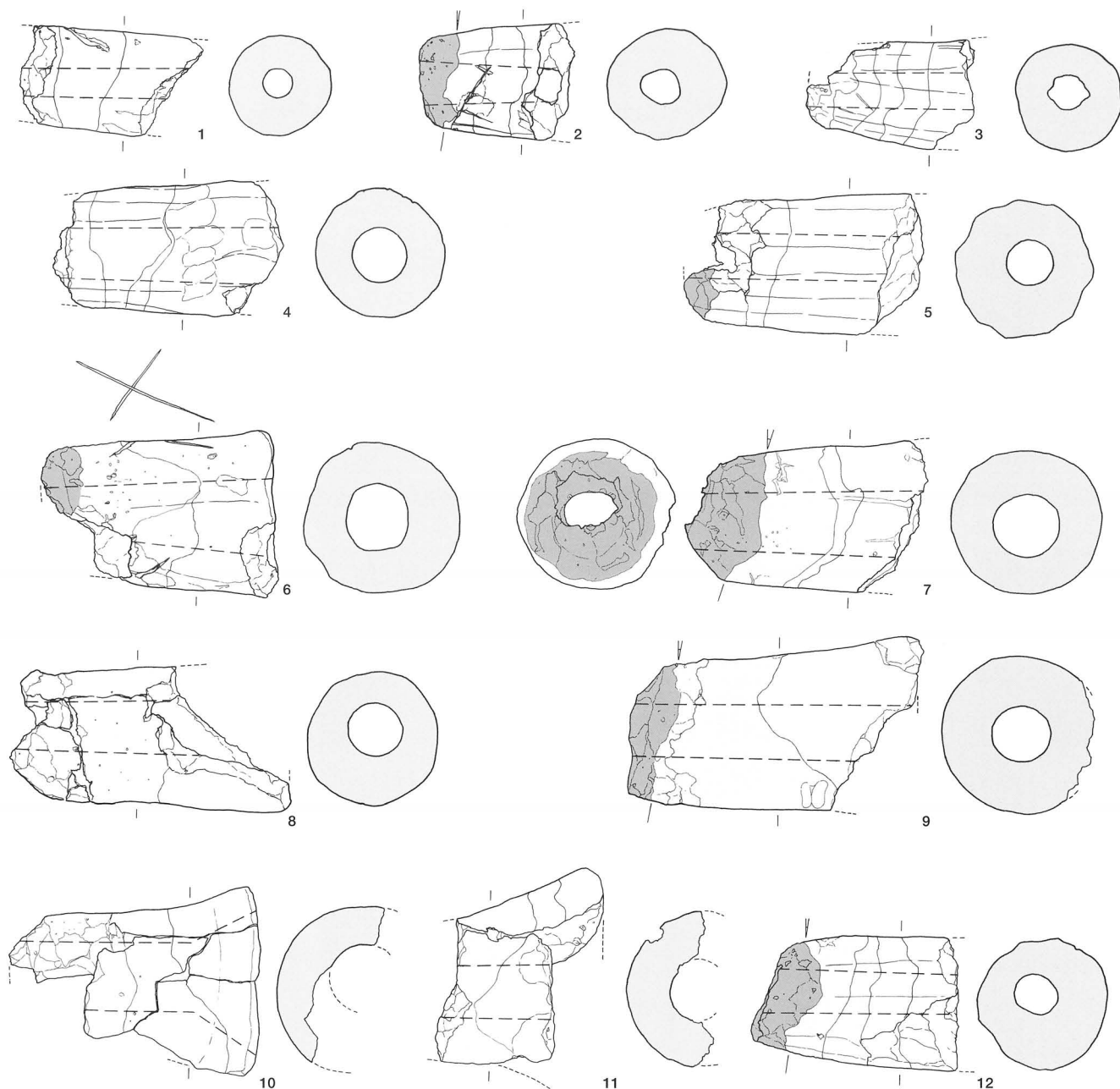


Fig.16 轆羽口 1:3

完存するものは少ない。先端が残るものは、溶解して黒色にガラス質化しており、白色のガラス質物が付着する。いずれも炉内への挿入角度は $5\sim 20^\circ$ と推定できる。地の色調は、橙褐色と黄褐色を基調とする。先端は暗灰色から青灰色に変色し、地色との境は帯状に灰白色から灰褐色となる。形状がわかるものでは、全長がやや短く裾が広がらないもの(6)、胴部から元口側に裾が緩やかに広がるもの(8・9・10)、先端からラッパ状に広がるもの(11)などがある。

1～3は、先端の外径3.5～4.0cm、内径1.5cm前後の小型の羽口。完存するものはないが、全長10cmほどであろう。これらの小型品には胴部が直線的な円筒形のもの

(1)と、先端側がすぼまるもの(2・3)の2種類がある。後者は、胴部の外面にヘラナデの痕跡がある。また3は内面に、細棒状の道具で通風孔を押し広げた痕跡があり、不整形な断面となる。小型品はいずれも北炭層から出土した。

4～12は、小型品よりも一回り大きい。先端の外径5.5～6.5cm、内径2.0～2.6cmである。

4～7は北炭層出土。4には、胴部の表面に長軸方向の成形痕が明瞭に残る。丸棒を芯として粘土を巻き付け、簾状の道具で外面を巻き締めて成形したか。成形後にはナデ調整をおこなっていない。なお5にも同様の成形痕がみえ、成形後に裾部を広げた指頭圧痕が残る。6～12

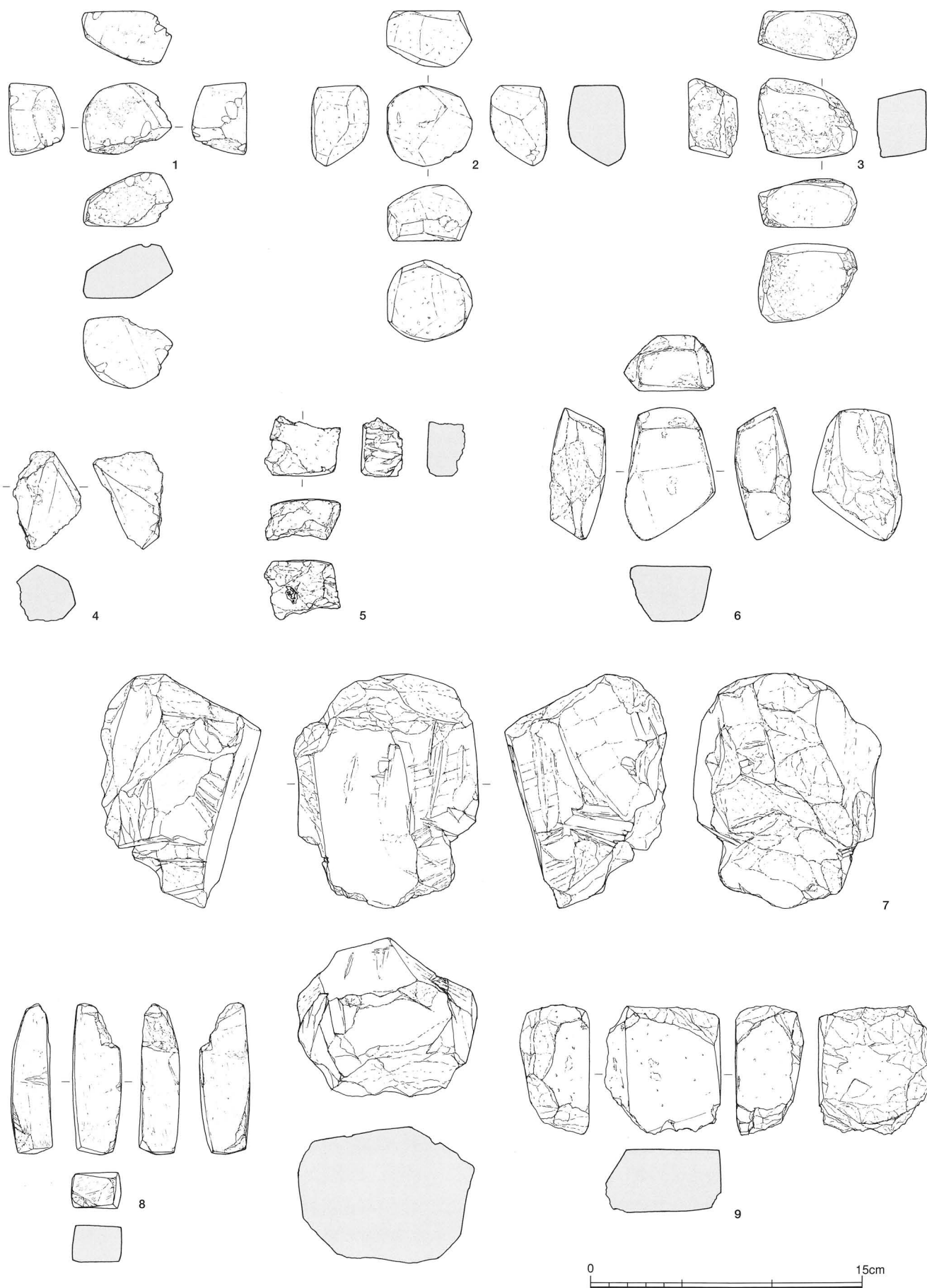


Fig.17 砥石 1:3

も胴部に何らかの成形痕が僅かにみえるが、ナデ調整に消されて詳細は不明。6は全長10.8cm。通風孔は先端側で径2.5cm、元口側で径3.0cm、元口端部では器壁が薄くなり内径5cmほどになる。元口端部は丸くおさまる。胴部に「×」字形のヘラ記号がある。このほかに「<」、「≡」、「△」のようなヘラ記号をもつものがある。7は先端が、著しく溶解して黒色ガラス質化している。炉内への挿入角度は15~20°である。8はSK609から鋳型、埴堀とともに出土した。全長12.8cm、先端の外形5.5cm、内径2.5cm。

9~12は区画溝出土。9は出土品のなかではやや大きい。全長13.6cm、先端の外径6.5cm、内径2.5cm。炉壁への挿入角度は10°前後である。8・9とも胴部の中ほどに指頭圧痕があり、緩やかに裾を広げている。10は全長11.5cm。裾を緩やかに広げており、裾の内面は剥落している。11は全長10cm前後、先端の外径5~6cm、元口の外径は約11cmに復原できる。出土品のなかでは元口が最も大きく広がる。12は先端に鉄滓が付着する。

D 砥石

砥石は60点以上ある (Fig.17)。SD605の北西に集中していたほか、北炭層、南炭層などから出土した。

石材は、石英斑岩、砂岩、流紋岩、アプライトなどがある。「据え砥」用の大型品は僅かで、ほとんどが「持ち砥」用の小型品である。小型品は、変則的な形状のものが多く、一般的な四角柱状のものは少ない。大きさ・形状が不揃いであること、細片を利用したのがあること、成形した痕跡がみえず破面を残すものが多いことなどから、荒割りないしは小割りした素材を成形せずに直に研磨に使った可能性がある。おそらく、ある程度の大きさの原石を工房に持ち込み、状況に応じて適当な大きさに分割して使用したのであろう。また、特定の石材に特徴的な形状のものがみられることから、工程などにより石材を使い分けたことが窺える。

1~5・8・9は石英斑岩製。この石質の砥石は、全体の3~4割を占める。1~5は明黄褐色から黄白色を基調とした縞状で、一部赤みを帯びる。粒子が細かく均質である。1~3は全面を使用し、特に側面を丸みがでるほどに多用する点で特徴的である。ほかの石材でこれらと同様の形状のものはみられない。1は長軸5.5cm、短

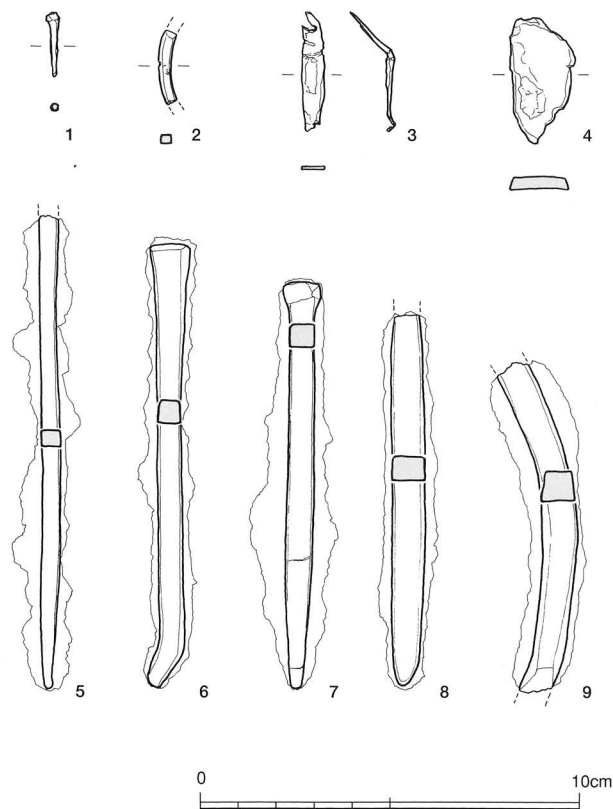


Fig.18 金属製品 1:2

軸4.4cm、全高2.7cmで2・3とも大差ない。3は角の部分に、幅0.5cmの溝状の研磨痕が数条ある。4は一辺2~4cmで不整な多面体であり、このほかに一辺7~8cmで1~2面を使用したものなどがある。5は銀片が付着しており、被熱痕跡がある。砥石を転用した銀製品鋳型の可能性がある。8・9は、1~5より白色に近く、縞状ではない。いずれも小口以外の4面を使用しており、8は小口の一方も使用する。9はやや大振りで長軸7.2cm、短軸6.4cm、高さ3.9cm。

6は砂岩製。明灰色で粒子はやや粗い。部分的に破面が残るが、ほぼ全面とも研磨に使用する。平面形は不整な四辺形である。

7は流紋岩製のやや大型品。乳白色で非常に軟質。粒子は細かい。上面を中心に使用しており、横断面は六角形状である。各砥面は研ぎ減りによって湾曲し、刃痕が残る。長軸13.0cm、短軸10.3cm、高さ8.7cm。

なお、図示していないが、アーコーズサンドもしくは花崗岩製の大型品が1点ある。粒子は不均質で粗い。上面のみを使用し、研ぎ減りが顕著である。長軸約25cm、短軸約11cm、高さ約14cm。

E 金属製品

金属製品は銅製品と鉄製品があり、工房の北区画、区画溝、土坑SX598、北炭層から出土した（Fig.18）。

銅製品はいずれも小片である（1～4）。1は小型の銅釘で、長さ1.5cm。2は角棒状で、表面は滑らかに研磨されている。佐波理製品の破片か。3は薄い銅板片。鋳孔と思われる孔が2箇所にある。縁飾金具の破片か。4は厚い銅板片で、僅かに丸みを帯びる。

鉄製品はほとんどが鉄釘である（5～8）。6・7はほぼ完存する。いずれも断面は一辺0.6cmの方形で、6は長さ10.7cm、7は長さ11.7cm。ほかに板状の不明鉄製品が数点ある。

F 鉄滓・銅滓

鉄滓は、調査区内各所から合計100kg弱が出土した。そのうちいわゆる椀形滓が2～3割を占め、ほかに粒状滓や鍛造剥片もみられる。今後詳細な分析により、生産工程の解明にとって重要な知見が得られることを期待する。また、鋳銅作業の際に坩堝や鋳型などからこぼれて固まったと思われる銅粒が各所から出土しており、坩堝片に付着した銅滓が多数ある。そのほか、長さ約14cm、幅約8cmの銅素材の可能性のある銅塊が、調査区中央の炉跡群付近から出土した。

3 鉄釜鋳造関連遺物

鉄釜鋳造土坑SX599からは鉄釜鋳型が、SX598からは鉄釜鋳造に関わる溶解炉壁片が多量に出土した。

A 鉄釜鋳型

鋳造土坑内に据え付けられていた鋳型は、製品取り出しの際に一部が破壊されていたものの、おおむね全周が残る。残存していた鋳型は鑊から口縁部、および鋳型の基礎（幅木）部分であるが、脆弱化していたため現地では保存処理を行い、遺構レプリカにはめ込んで出土状態の保存を図った。

出土状態は、南側と北側が幅20cmほど欠損し、東半部は外方にむけて倒れ込んだ状態にある。これは鋳型の破片の出土状況とあわせて、取り出しの際に丘陵の傾斜を利用して、製品を東側に落とし込んだ結果と考えられる。

口縁から鑊までの溶鉄をうけた部分は、表面が暗灰色

に変色し、還元状態にある。口縁から下の部分には長さ約22cmの幅木を設けており、この部分で内型と密着させ、鋳型を固定する。表面は赤褐色である。

SX599埋土は全て整理室へ持ち帰り室内で水洗した。鋳型片は小片を含めて総数1,000点近くある。うち約4割弱が鋳肌面を残す。口縁部から鑊、胴部にいたる破片が出土しているが（Fig.19）、胴～底部については細片化が著しく、本来の形状は不明。

1～3は鋳型外型。胎土に粉殻を多く含み、スサを含む部分もある。空隙部が多く、全体に脆弱である。色調は黒褐色。鋳肌面（真土層）は0.3cmほどの厚みのキメ細かい砂質粘土で形成され、地の粘土層と肌わかれした部分が多い。表面に明瞭な挽型痕跡を確認できる。また、鋳型と製品の分離を容易にするための離型剤（クロミ）の痕跡が部分的に残る。

1は羽釜の肩から鑊にかけての鋳型。鑊には肩部寄りと端部寄りに2条ずつ、計4条の凸線がめぐる。表面は強く還元しており、灰～暗灰色である。2は鑊の端部にあたる鋳型。鑊と接する部分の表面は暗灰色で還元状態、上部の平坦面は赤褐色である。また、平坦面の鑊端部に近い部分は0.5cmの幅で帯状に灰～淡黄灰色に変色しており、上鋳型との合わせ目と考えられる。鋳型外型は鑊の部分に境に上下2段に分割して造形されている。この部分では上下の鋳型に段を作り出して、ズレを防ぐ工夫をしている。3は鑊の裏側にあたる鋳型。表面はやや粗いが、ほぼ平坦である。中央部に0.5cmほどの幅で帯状に灰～淡黄灰色に変色した部分があり、この内側は暗灰色、外側は赤褐色に変色している。赤褐色部分には一部に鋳バリも認められる。また、表面にはごく薄く黒色付着物があり、クロミを塗布した痕跡と考えられる。

4は内型である。胎土は粉殻を多量に含む粘土で、脆弱である。色調は外側から暗赤紫色、黒色の順に変色しており、鋳肌面のみ暗灰色に還元して硬化する。鋳肌面は0.1cm前後の長石を多く含む砂質粘土で形成されており、外型と比べてやや粗い。これは鋳造時に発生するガスを内側の空洞部に逃がすための工夫と思われ、鋳型に使用する砂が選択された可能性を示唆する。表面には挽型痕跡はみられず、部分的に斜め方向の擦痕も観察できることから、内型は削り式で造形された可能性が強い。

これらの鋳型片をもとにして製品の形状を復原すると

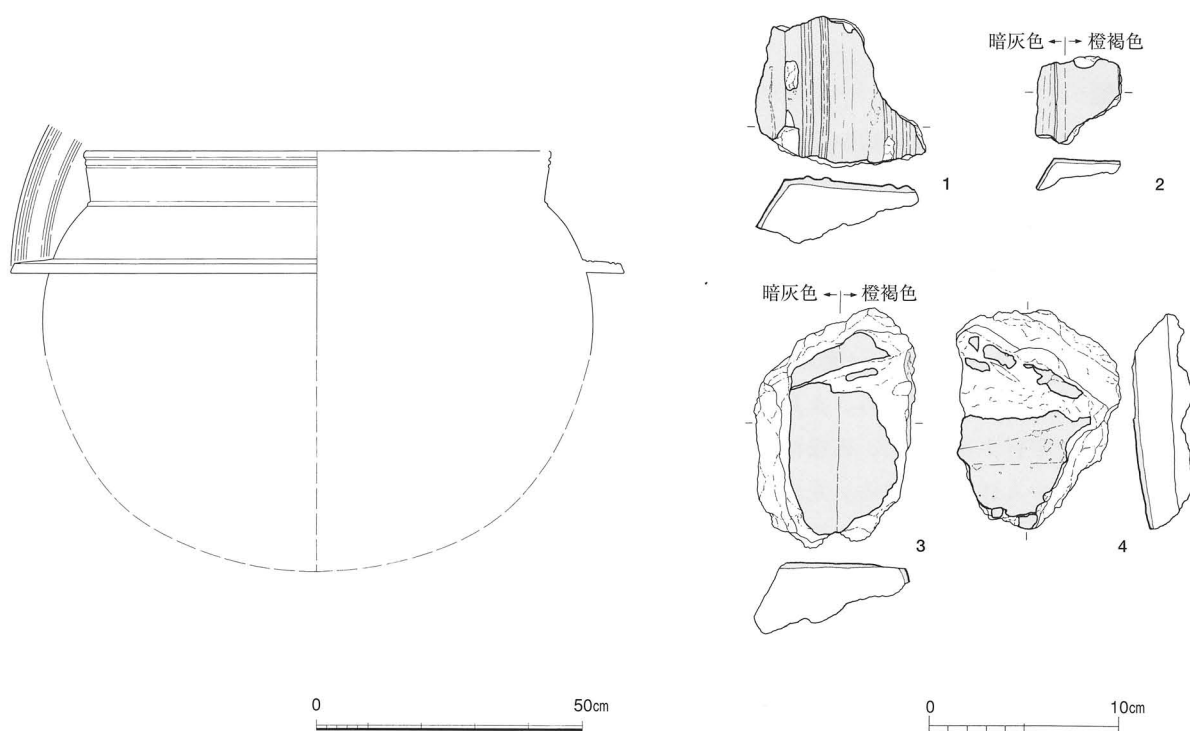


Fig.19 鉄釜鑄型片・鉄釜復原図 鑄型片は1:4、復原図は1:14

Fig.19のようになる。口縁部から鰐、及び胴上半部については残存していた鑄型片から、本来の形に近い復原が可能であるが、胴部下半から底部にかけては不明な点が多い。復原した羽釜は口径88cm、推定高80cm程度で、胴部上半に幅8cm、厚さ2cmの鰐がとりつく。鰐の表面には1条の凸線が外端と内端に巡る。この鰐から弧状に内湾する肩部が立ち上がり、そこからやや外反ぎみに口縁部が直立する。口縁と肩部の境の屈曲部と、口縁の端部直下にもそれぞれ1条の凸線が巡る。胴部は球形に近くこの湾曲で底部に至るのであろう。

中世の羽釜は、鰐から口縁部のあいだにゆるやかな曲線の肩部をもち、胴部の形状が球形に近く体部と底部との境目がゆるやかなものから、鰐から口縁部が直立し体部と底部との境が明瞭になるものへと形態変化することが指摘されている（五十川伸矢「中世の鍋釜」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集』1997年）。復原した鉄釜は、鰐から肩部にかけて弧状に湾曲し、中世の古い段階のものに通じた形態的特徴が認められる。

古代の大型鉄製品は今まで出土事例が少なく、不明な部分が多かったが、本例によりその実態の片鱗を窺うことができた。今後の事例の増加により、古代から中世へかけての鉄釜の形態変化や製作技法の変遷の様相が明らかになることを期待したい。

B 溶解炉

調査区東南端の土坑SX598から、合計80kg以上の溶解炉壁の破片がまとまって出土した。比較的大きい破片でも一辺20cmほどで、多くはそれ以下である。送風管の挿入孔の一部とみられる破片があるほかは、形状がわかるものは少ない。これらは胎土の違いにより、スサを多く含むものと、スサを含まないものの2種類にわかれる。前者の色調は、暗灰色・青灰色・褐灰色であり、赤褐色の部分はみられない。後者には土器片が混入しており、色調は暗灰色・青灰色・褐灰色・赤褐色である。

民俗例のいわゆる「こしき炉」は上から、原燃料の投入・原燃料の予熱・原料の溶解をおこなう「上こしき」と「こしき」、溶解した金属・滓を溜める「湯だめ」という3つの部分からなる。これを参考に出土した溶解炉を復原すると、スサを多く含み、暗灰色から褐灰色に還元された部分が最も高温になる部分、すなわち原料を溶解する部分に相当しよう。なお、内から外に向かって青灰色から赤褐色に連続して変色する破片から推定すると、器壁の厚さは10～15cmに復原できる。

鉄釜鑄型と溶解炉壁の付着物を科学分析した結果、両者とも鉄滓であることがわかった。また、鑄造土坑SX599とSX598から出土した土器は、ほぼ同時期のものである。これらのことから、SX598出土の溶解炉は、鑄造土坑SX599の鉄釜鑄造時に使用されたと判断できる。

4 瓦磚類

川原寺創建から平安時代の瓦磚類が大量に出土した。

A 軒丸瓦 (Fig.20)

8型式32点のほか、型式不明が2点出土した (Tab.2)。601型式は面違鋸齒縁複弁八弁蓮華紋をもつ川原寺の創建軒丸瓦である (1)。A～C・Eの4種に細分できるが、今回の調査で出土したのはC種のみ。丸瓦部は、広端部凹凸両面に側辺と平行する刻み目、広端面に丸瓦の円弧と平行する刻み目を入れて接合する。瓦当裏面のやや高い位置に浅く差し込むものが目立つ。丸瓦側面にも刻みを入れるものもある。瓦当裏面は、断面形を中窪み状にするもの (①)、ヘラ削りで平滑に仕上げるもの (②)、ナデもしくはヘラケズリで平滑に仕上げるもの (③) がある。①と③は瓦当裏面と瓦当側面の角度がほぼ90°になるが、②はその角度が90°よりも鈍角になる。丸瓦の接合方法は①～③とも共通するが、③には丸瓦を瓦当裏面にほとんど差し込まない例がある。また、接合する丸瓦の厚さが異なっており、①は1.7cm～2.0cm、②は1.5cm前後、③は2.0cm～2.5cm程度である。

608型式は直立縁に面違鋸齒紋を配置する複弁八弁蓮華紋である (2)。過去の川原寺の調査における出土点数は非常に少ないが、外縁の面違鋸齒紋をそのまま残す例と削り取る例が確認されている。今回の調査では後者のみが出土した。瓦当紋様を601型式と比較すると、蓮弁が長く、中房は凹レンズ状にくぼむ。丸瓦部は、広端部無加工で瓦当裏面の高い位置に接合している。同範品が定林寺で採集されている (保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史學會、1932年)。

621型式は紀寺式の雷紋縁複弁八弁蓮華紋で小山廃寺と同範 (3)。丸瓦部は広端部凹面側を斜めに削って接合している。刻み目は施さない。

645型式は重圈紋縁鬼面紋軒丸瓦 (4)。過去の川原寺の発掘調査での出土はないが、採集資料が1点ある (保井1932年)。すべて小破片で外縁のみの残存である。大官大寺、雷丘東方遺跡、地光寺跡から同範品が出土している。

701型式は、外区内縁に珠紋を配置し、外縁は素文縁の細弁十六弁蓮華紋軒丸瓦 (5)。丸瓦部は広端部無加工で接合している。同範と思われるものが橘寺 (保井1932年)、奥山廃寺、豊浦寺で採集されている (石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』財団法人聖徳太子奉讃會、1936年)。

715型式は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (7)。小破片のため、製作技法など詳細は不明である。

716型式は新型式である (8)。内区は複弁蓮華紋で八弁と推定できる。外区は欠損のため不明。中房には蓮子が二重にめぐる。

721型式は細弁十六弁蓮華紋でほぼ完形のものが出土した (6)。成形技法は横置き型一本作りで、丸瓦部は玉縁丸瓦である。同範と思われるものが額安寺で採集されている (保井1932年)。

出土した軒丸瓦のうち、601・608・621・645型式は創建期、701・715・716・721型式は平安時代である。今回の調査では奈良時代の軒丸瓦は出土していない。

B 軒平瓦 (Fig.20)

3型式9種18点が出土した (Tab.2)。

651型式は、川原寺の創建軒平瓦である四重弧紋軒平瓦。A～Eの5種に分類でき、B種はさらに細分できる。今回の調査では、A・B1 (12)・B3 (11)・B4・C・D (9) 種が出土した (各種の詳細については、花谷浩「川原寺出土重弧紋軒平瓦細見」『年報1999-I』を参照)。これらはすべて段顎である。平瓦部の残っているものは、凹凸両面を丁寧にスリ消し、布目や叩き目を残さない。側面は凹凸両面側から深く削り、断面形が剣先形になるように加工している。須恵質で堅緻なものがほとんどで、五條市荒坂瓦窯産と考えられる。

652型式は三重弧紋軒平瓦である。小破片ではあるが、平瓦部凹面に布目を確認できる。

783型式は、スベード型の中心飾りを置き、一本の蔓茎を左右に展開させた均整唐草紋軒平瓦 (10)。外区は素紋であるが、幅が広いものと狭いものがある。顎の形態はともに直線顎に近い曲線顎。

出土した軒平瓦のうち、651・652型式は創建期、783型式は平安時代である。軒丸瓦と同様に奈良時代の軒平瓦は出土していない。

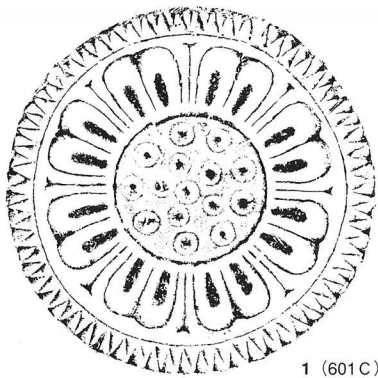
C 丸・平瓦 (Fig.21)

丸瓦2,528点 (386.62kg)、平瓦13,123点 (1,767.73kg) が出土した。丸・平瓦とも創建期のものと平安時代のものに集中する。

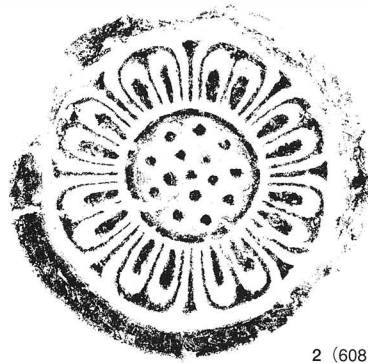
創建期の丸・平瓦は、丸瓦をⅠ～Ⅱ類、平瓦をⅠ～Ⅵ

Tab. 2 出土瓦磚類集計表

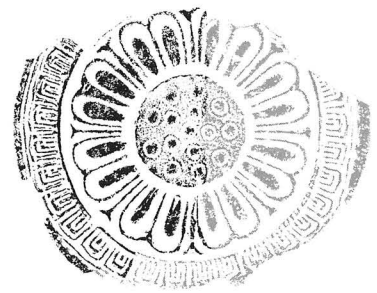
軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種別	点数
601	C	16	651	A	1	切り面戸瓦	1
608		7		B	2	切り熨斗瓦	1
621		2		B ₁	2	隅切瓦	1
645		3		B ₃	1	文字瓦	1
701		1		B ₄	2	ヘラ描き丸瓦	3
715		1		C	1	ヘラ描き平瓦	4
716		1		D	6	磚仏	1
721		1	652		1	磚	6
不明		2	783		2	土管	3
合計		34	合計		18		



1 (601 C)



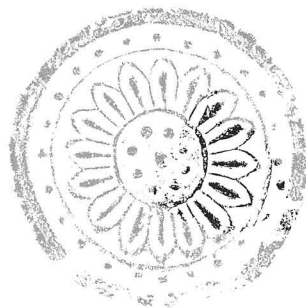
2 (608)



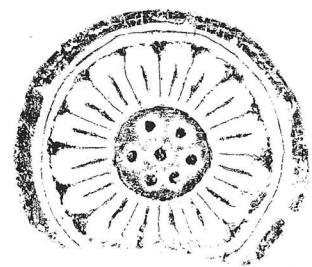
3 (621)



4 (645)



5 (701)



6 (721)



7 (715)



8 (716)



9 (651 D)



10 (783)



11 (651 B₃)



12 (651 B₄)

Fig.20 出土軒瓦 1:4

類に分類する（丸・平瓦の分類については、小谷徳彦「川原寺の丸・平瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅣ－川原寺式軒瓦の成立と展開（1）－』奈文研、2003年にもとづき、必要に応じて変更を加えた。以下、変更点を中心に報告する。）。

丸瓦は、Ⅰ類が玉縁丸瓦、Ⅱ類が行基丸瓦である。

Ⅰ類はA～Fの6種に細分できる。ⅠA～Cは凸面をスリ消し叩き目を残さないもので、段部凹面側の屈曲が非常に強い。須恵質で堅緻な焼成である。ⅠDは、A～Cと比較すると、段部凹面側の屈曲がやや弱く、焼成もやや軟質である。ⅠEは、玉縁部凸面に水切り用の凸線があり、玉縁が短いという特徴をもつ。ⅠFは、今回新たに設定した。凸面を横縄叩きした後、ナデ調整を施す。叩き目が残るものとスリ消すものがある。段部凹面側の屈曲はⅠDと同様にやや緩い。瓦溜りSX594からⅠFの生焼けのものが出土している。

Ⅱ類は全長43.0～44.0cmのものが大半だが、26.0cmと小型のものがある。

創建期の平瓦の製作技法は、Ⅰ～Ⅴ類が粘土板桶巻作り、Ⅵ類が桶型内巻作りである。凸面をスリ消して叩き目を残さないもの（Ⅰ類）、格子叩き（Ⅱ類）（5）、横縄叩き（Ⅲ類）、叩きしめの方向が円弧を描く縄叩き（Ⅳ類）、平行叩き（Ⅴ類）、凸面布目平瓦（Ⅵ類）（2）に分類でき、凹凸面の調整や叩きの違いでさらに細分が可能である。今回、Ⅰ類の細分に若干の変更を加えた。

Ⅰ類は凹凸面の調整手法でA～D種に分けられる。ⅠA～Cは、凸面の叩き目と凹面の布目をほとんど残さず、側面を剣先形に加工する非常に丁寧な作りで、焼成は須恵質（1）。一方、ⅠDは凹面を調整せずに布目を残す。凸面はスリ消したが、横縄叩きや円弧状の縄叩きの痕跡を残すものがある（7）。

今回の調査では、焼き歪みのある瓦や生焼け瓦が多く出土した。焼き歪みのある平瓦には、ⅠDと密度9～11本／3cmほどの縄を使用したⅢB（4）、9本／3cmほどの縄を使用したⅣB（3）がある。これらの瓦は、瓦窯SY595の周辺から多く出土している。

一方、生焼けの平瓦はⅣBのみで、瓦溜りSX594から集中して出土した。

また、焼き損じて平瓦が熔着した塊が2点出土している（PL14）。1点は17枚、もう1点は16枚の平瓦が熔着する。これらの平瓦はすべて密度13～15本／3cmほどの縄を使

用したⅢCである（8）。また、両者とも凸面同士が熔着した部分と凹面同士が熔着した部分、さらに凹面と凸面が熔着した部分があり、凹面と凸面が熔着した平瓦は11枚を数える。これは平瓦の窯詰めの仕方に起因するであろう。

このほか、奈良時代以降の丸・平瓦も出土している。

丸瓦は玉縁丸瓦が大半だが、行基丸瓦も出土している。玉縁部に水切り用の凸線をもつものがある。段部凹面側の屈曲が非常に緩いのが特徴である。

平瓦はすべて一枚作り。凸面に縦縄叩き目、凹面に布目を残すものが大半で、凸面側の側縁付近に凹型台の痕跡や凹面に内叩きの痕跡を残すものがある（6）。

これらの丸・平瓦は平安時代のものがほとんどで、鎌倉時代以降の丸・平瓦は出土していない。また、奈良時代のものは非常に少なく、同時代の軒瓦が出土していないことと共通する。おそらく、近接した場所に奈良時代の瓦葺きの建物は存在しなかったであろう。

D 道具瓦・その他の瓦磚類

切り面戸瓦と切り熨斗瓦、隅切瓦のほか、鴟尾、ヘラ描きのある瓦、磚、土管、磚仏などが出土した。

鴟尾は、鱗の破片で内外面とも正段になる。

ヘラ描き瓦の中には、文字の書かれているものがあり、「師国寺」と読める（Fig.21-9）。しかし、破片であるため上下に文字が続くかどうかは不明。このヘラ描き瓦は、一枚作りの平瓦で平安時代のものと考えられる。

磚は、これまでの調査でも出土している上面に波形を彫り込んだ大型矩形磚と、同心円紋叩き磚が出土した。磚仏は小型独尊磚仏である。幅2.3cm。裏面は両側縁を斜めに削り断面台形状に仕上げている。天蓋部分のみの小片で全体像は不明であるが、川原寺ではこれまでに類例のない型式である。

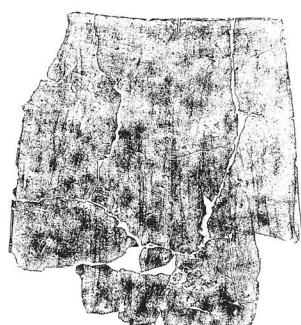
E 瓦窯関連の瓦

瓦窯SY595は前庭部と焚口付近のみを検出ただけで、窯体のほとんどは調査区外に位置する。そのため、窯体内から出土した瓦はないが、熔着した瓦や焼歪みのある瓦、生焼けの瓦などの出土から、この瓦窯で焼かれた瓦を推定できる。

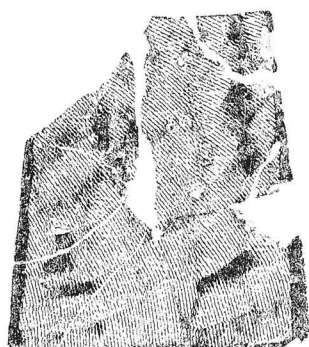
上述したように、焼き歪みのある平瓦はⅠD・ⅢB・



1 (IB, I群)



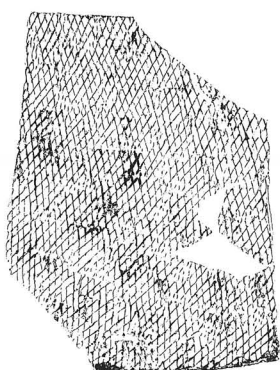
2 (VA, I群)



3 (VB, II群)



4 (III B, II群)



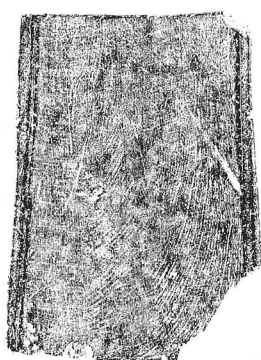
5 (II B, III群)



6 (一枚作り)



7 (ID, II群)



8 (III C, II群)



9 (文字瓦)



Fig.21 出土平瓦 1~7は1:9、8・9は1:6

ⅣＢ、生焼けの平瓦はⅣＢに属し、熔着した平瓦はⅢＣであった。一方、生焼けの丸瓦はⅠＦに分類される。これらのことから、瓦窯では平瓦ⅠＤ・ⅢＢ・ⅢＣ・ⅣＢと丸瓦ⅠＦが生産されたと考えられる。

軒丸瓦では、瓦窯の周辺から生焼けの608が出土している。また、同じく瓦窯の周辺から焼成不良の601Ｃも出土している。

一方、軒平瓦には生焼けや焼き歪みのあるものはみられないが、今回出土した652は608と焼成や胎土が類似する。

以上の事実から、川原寺瓦窯で生産された軒瓦は、軒丸瓦が601Ｃと608、軒平瓦が652であると推定できる。ただし、652については、過去の調査で出土した資料と比べ側面の調整手法などが異なっており、すべての652が本瓦窯で生産されたかどうかは今後の調査の進展を待つて判断したい。

F 川原寺創建期の瓦窯

これまで川原寺の創建期の瓦窯として知られていたのは荒坂瓦窯だけであったが、それ以外の瓦窯の存在も想定されていた（金子裕之「軒丸瓦製作技法に関する二、三の問題」『文化財論叢』奈文研、1983年、花谷浩「飛鳥の川原寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅣ－川原寺式軒瓦の成立と展開（1）－』奈文研、2003年）。

今回、新たな瓦窯が発見されたことにより創建期の瓦窯が荒坂瓦窯だけではないことが判明し、川原寺瓦窯で生産された瓦も推定することができた。これらの成果を踏まえて、川原寺の創建期の瓦窯について触れてみたい。

荒坂瓦窯産の瓦は、焼成が堅緻で須恵質という特徴をもつ。この特徴は、軒丸瓦601Ａ・Ｂ・Ｃ第1段階～第2段階・Ｅ、軒平瓦651Ａ・Ｂ・Ｃの一部・Ｄ・Ｅ、丸瓦ⅠＡ～Ｃ・Ｅ、平瓦ⅠＡ～Ｃ・Ⅵ類にみられ、どれも非常に丁寧に作られている（Ⅰ群）。

一方、川原寺瓦窯産の瓦は、上述したように、軒丸瓦601Ｃの第3段階以降・608、軒平瓦652、丸瓦ⅠＦ、平瓦ⅠＤ・ⅢＢ・Ｃ・ⅣＢである（Ⅱ群）。

Ⅰ群とⅡ群をこのように規定すると、どちらにも属さない一群（Ⅲ群）の帰属が新たな問題となる。Ⅲ群には丸瓦ⅠＤ、平瓦Ⅱ・Ⅴ類とⅢ・Ⅳ類の一部が該当する。また上述したように、軒瓦601Ｃは、瓦当裏面の成形方法と

接合する丸瓦の厚さで3つのグループに分けることができる。

一方、651Ｃには軟質な焼成のグループがあり、これは荒坂瓦窯産ではない。また、川原寺瓦窯産のものとも胎土や焼成が異なる。したがって、Ⅲ群の軒瓦には601Ｃと651Ｃがあたると推測できる。

では、Ⅲ群の瓦の生産地はどこか。

天平20年（748）の『弘福寺三綱牒』によれば、当時大和国広瀬郡内に存在した川原寺の所領の中に「瓦山壹處」があり、その域内に「瓦竈参口」が含まれている。同史料の記す四至によれば、「瓦山」の範囲は馬見丘陵の南端部、現在の真美ヶ丘ニュータウン一帯に相当する（近鉄五位堂駅北方には現在も「瓦口」の地名が残る）。よって、遅くとも8世紀中頃には、川原寺の所有する瓦窯がこの辺りに存在したと考えられる。なお、「瓦山」推定地の周囲には、香芝市下田東遺跡（「瓦口」地名遺存地の西側）や広陵町百済寺が隣接している。

香芝市下田東遺跡で出土した四重弧紋軒平瓦が651Ｃに酷似している（佐藤良二ほか「下田東遺跡の出土瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅣ－川原寺式軒瓦の成立と展開（1）－』奈文研、2003年）点や、広陵町百済寺から601Ｃに酷似した軒丸瓦が出土している（清水昭博『王家の寺々－広瀬・葛下地域の古代寺院－』檀原考古学研究所附属博物館、2000年）ことは、上記の文献史料の記載を補強するものとなり、Ⅲ群の瓦の生産地は広瀬郡周辺であったと想定できる。

以上のことから、川原寺創建期の瓦窯は、荒坂瓦窯と川原寺瓦窯、そして広瀬郡にあると考えられる瓦窯（仮称、広瀬郡瓦窯）の3つの瓦窯が存在していたと推定できる。

このうち、601Ａ～Ｃ・Ｅと651Ａ～Ｅのすべてを生産していた荒坂瓦窯が最も早く操業していたことは、601Ｃの第1・2段階が他の瓦窯で生産されていないと考えられることから明らかである。

しかし、川原寺瓦窯と広瀬郡瓦窯の先後関係については、今回明らかとなった601Ｃの3つのグループがどのような関係にあるかを検討しなければならず、過去の調査で出土した瓦を含めて総合的に分析検討する必要がある。現段階では両瓦窯の先後関係について明言できないが、個別資料を範傷の調査成果によって分類して製作技法との関連性を検討し、川原寺創建期の瓦生産のあり方を明らかにすることが、今後の課題である。

5 土器類

土器類は整理箱85箱分が出土した。弥生時代から近世に至る各時期の土器があるが、古墳時代および7世紀代の土師器・須恵器が大多数を占める。特に土器溜りSX650や古墳時代の溝SD640からは、まとまった量の土器が出土した。他に漆付着土器や被熱土器などの工房に係する土器、土馬などがある。

ここでは、工房関係遺構や鉄釜鑄造土坑SX599、土器溜りSX650、瓦窯SY595など、遺跡を理解する上で要となる遺構から出土した土器を中心に報告する。なお、7世紀代の土器の時期区分や器種名、調整手法名などは、『飛鳥藤原宮発掘調査報告Ⅱ』など、従来の奈文研刊行物に準拠する。

A 工房関係遺構出土土器 (Fig.22-1~13)

ここでいう工房関係遺構とは、炉跡や工房テラス面、工房区画溝を指すが、各遺構出土資料には良好なものが少ないため、下層工房直上層の土器も含めて概述する。

炉跡は大きく2時期ある。上層の炉跡からは奈良時代の土器が、下層の炉跡からは、図示できるものはないが7世紀の土器が出土した。1は上層の炉跡SX584直上で出土した須恵器杯B蓋。天井部が平坦で器高が低く、わずかに口縁端部が屈曲する器形。平城宮土器V~VIに比定される。口径20.2cm、器高1.3cm。

工房テラス面出土の土器は、土師器には杯C・杯H・高杯・鍋・甕などが、須恵器には杯G・同蓋・杯H・高杯・平瓶・壺・甕などがある。小片が多いが、7世紀後半以降の土器は含まない。

工房区画溝では、土師器は杯C・杯H・蓋・高杯・鉢・鍋・壺・甕・竈などが、須恵器は杯G・同蓋・杯H・同蓋・高杯・壺C・甕など出土した。9~13はSD602から、2・5・6・7はSD605から出土。

土師器杯C I (2) は、口縁端部内側に内傾する明瞭な面をもつ。口縁部ヨコナデ調整、底部ヘラケズリ調整で、口縁部を密に磨く。内面には一段放射暗文を施す。橙褐色で砂をほとんど含まない精良な胎土。口径17.0cm。杯Gは、胎土・器形によってa~cの3種類に細別されている(奈文研『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』1987年)。杯Ga II (6・7) は、丸い底部から緩やかに湾曲し、口縁がわずかに外反する。口縁部のみをヨコナデ調整し、暗文は施さない。口径13.6~14.4cm、器高3.3~3.5cm。杯

H (5) は、丸く浅い杯部に長く外反する口縁部をもつ器形。底部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ調整。底部と口縁部の境の稜線が明瞭である。口径11.6cm、器高3.3cm。

須恵器杯G (10) は、底部ヘラ切りのまま。口径9.0cm、器高2.7cm。杯G蓋には、平らな頂部で、かえりの先端がわずかに口縁より下方に突出するもの(11)と、丸い頂部で器高がやや高く、小さなかえりをもつもの(9)がある。身と接する部分の直径はともに9.0cm。杯H (12・13) は、ヘラ切りのままの平坦な底部から直線的に開き、低い立ち上がり部をもつ。13は、黒色小粒を多く含み、焼け歪む。蓋と接する部分の直径は11.4cm、器高3.7cm。

北端の工房直上層からは、土師器杯C・杯G・杯H・皿A・高杯・壺・甕が、須恵器杯G・同蓋・杯H・同蓋・甕・高杯・鉢・壺・甕などが出土した。

土師器杯C I (3) は2とは異なり、口縁端部内側に面をもたない。b1手法。口径18.2cm、器高5.0cm。皿A (4) は3と口径が同じ。口縁端部の形状や胎土が類似する。内外面とも摩滅しており、調整は不明。

須恵器杯G蓋(8)は、9と同様の器形で、身と接する部分の直径は8.2cm。

下層の工房関係遺構の土器は、飛鳥I~IIIの各時期のものがある。その中で、径高指数27の土師器杯C (3) などは新しい傾向をもち、飛鳥IIIに比定できる。

B 鉄釜鑄造関係遺構出土土器 (Fig.23)

鉄釜鑄造関係遺構とは、鑄造土坑SX599と、鑄造後に溶解炉片を投棄した土坑SX598を指す。

SX599出土土器は、小片が多く図化できたのは土坑埋土より出土した土師器杯Gb I (3) のみである。底部は指オサエ、口縁部はヨコナデ調整する。底部は直線的で、口縁端部には面をもたない。口径15.0cm。

SX598出土土器は、溶解炉片の有無によって上・下層に分けて取り上げたが、器種構成に違いは見られず、接合関係も多く認められたため、同一に扱う。

土師器には杯A・杯B・杯C・杯D・皿A・鍋・甕が、須恵器には杯B・同蓋・杯H・碗・鉢・甕がある。

土師器杯A (5~9) には、径口指数25前後のもの(6・8・9)と、20前後で浅いもの(7)、30前後で深いもの(5)がある。調整はいずれも底部をヘラケズリし、口縁部にミガキを施すb1手法。7のように摩滅している個

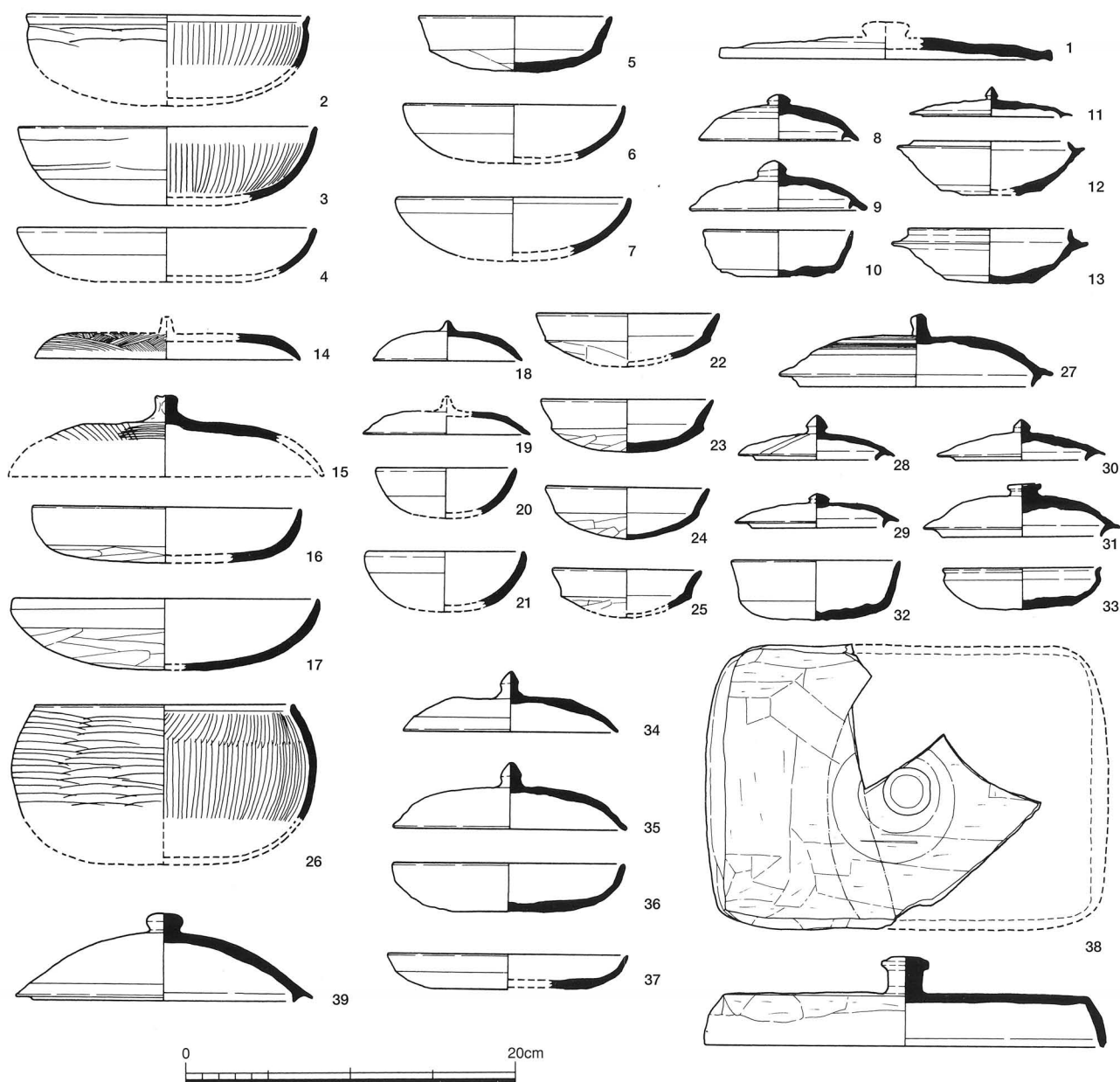


Fig.22 工房関係遺構（1～13）、土器溜りSX650出土土器（14～39） 1：4

体が多いが、暗文の確認できるものはすべて二段放射暗文をもつ。6・9は暗文が粗い。7・8は口縁端部の巻き込みが見られない。杯G（1・2・4）には、杯Hに似た長く外反する口縁部をもつもの（1）や、SX599出土の4と同一形態の杯G b（2）、杯C Iに器形が似ている杯G a（4）に細分できる。いずれも暗文は施さない。1は底部が張る器形で、杯Ga～Gcのいずれにも属さない。口径12.4cm、器高2.9cm。2は口径13.8cmで3に内接する法量をもつ。4は口縁端部を小さく外反させる。口径17.6cm。皿A（10）は、b0手法で口縁端部を小さく外反させる。

放射暗文は粗い。口径23.0cm。

須恵器は、全体の約2割と出土量は少ない。小片が多いため図示することはできないが、杯B蓋にはかえりのないものが多い。

鋳造関係遺構出土の土器は、器形や法量が藤原宮東面内濠SD2300出土土器に類似しており、飛鳥Vに位置付けることができる。

C 土器溜りSX650出土土器 (Fig.22-14～39, PL-15下)

SX650からは、整理箱25箱分と大量の土器が出土した。

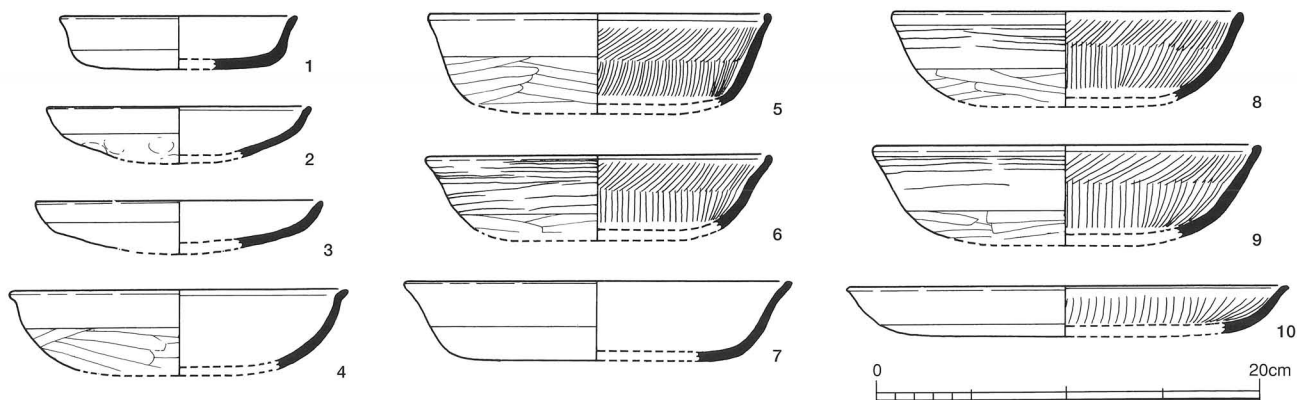


Fig.23 鉄釜製造関係遺構出土土器 1:4

約 9 割は土師器で、須恵器とロクロ土師器が少量ある。土師器の大半は細片化、および摩滅している。

土師器には杯 H・杯 X・皿 A・蓋 X・高杯・盤・鍋・壺・甕・ミニチュアの高杯が、須恵器には杯 G・同蓋・杯 H・同蓋・杯 X・蓋 X・盤蓋・高杯・甕・壺・甕が、ロクロ土師器には、杯 B 蓋・杯 G・杯 H がある。いずれも杯皿類がほとんどで、煮沸具や貯蔵具はごく少ない。

土師器杯 X (16・17・20・21) は、杯 C に似た器形をもつが、暗文は施さない。底部外面はヘラケズリ調整するものと不調整のものがあり、不調整のものは杯 G との区別が困難である。法量によって I・II・III に分けることができる。杯 X I (16・17) は、口径 16.4~18.8cm。口縁端部外面に小さな面をつくる。杯 X II は口径 14cm 前後。杯 X III (20・21) は、口径 8.6~9.8cm で深い器形。21 は口縁端部外面に面をもたない。蓋 X (14・15・18・19) は、200 点以上と多量に確認されるが、摩滅した破片は杯皿の身との区別が困難であり、つまみの有無によって蓋と判断した。杯 X と同様に I・II・III に分けることができる。蓋 X I (14・15) は、口径 16cm を超える大型品。つまみの形状は、先端が平らかやや窪むものが多い。天井部外面には、14 はハケ目調整、15 はミガキを施す。蓋 X II は、口径 13~15cm。つまみは乳頭状を呈し、先端が平らなもの、丸いもの、窪むものなど、バラエティーに富む。天井部にハケ目調整を施すものもある。蓋 X III (18・19) は、口径 9~10cm の小型品。つまみは丸みを帯びるものに限定される。蓋 X は、杯 B 蓋と器形が似ているが、SX650 からは杯 B 身は出土していない。そのため、蓋 X と同様に法量分化する杯 X を、対応する身と想定する。杯 H (22~25) は、口径 9.0~11.0cm。鉢 (26) は、外面はヘラケ

ズリ調整の後に、口縁端部付近まで密にヘラミガキを施す。内面には二段放射暗文をもつ。口径 15.6cm。

須恵器杯 G 蓋 (28~30) は、つまみの形態で、宝珠形を呈するもの (28) と、頂部が丸く付け根のくびれが弱い乳頭状のもの (29・30) に分けることができる。身と接する部分の直径は 9.2~9.5cm。杯 G は、蓋に比べて極端に数が少ない。32 は底部ヘラ切りのままで、口径 10.2cm、器高 3.7cm。杯 (33) は、内湾ぎみの口縁で、端部を外反させる。底部はヘラ切りのまま。口径 9.6cm、器高 2.5cm。杯 X (36) は、杯 H 蓋を反転させたような器形をもつが、杯 H に比べ口径が大きい。底部はヘラ切りのまま。口径 14.2cm、器高 3.0cm。皿 X (37) は杯 X に似ているが、器高が低い。底部回転ヘラケズリ調整。口径 14.5cm、器高 2.1cm。蓋 X (34・35) は、土師器蓋 X に似た形態で、付け根のくびれが弱い宝珠形つまみをつける。34 は天井部ロクロケズリ調整、35 は天井部までロクロナデ調整。口径 13.0~14.0cm、器高 3.7~4.1cm。杯 X・蓋 X とともに、軟質で灰白色や黄白色を呈する。形態・法量・調整手法は、土師器杯 X・蓋 X に類似している。蓋 (27) は、高く突出するつまみをもつ。天井部にはカキメ調整を施す。口径 16.6cm と大型であり、椀に被るか。蓋 (31) は、扁平で頂部がやや窪むつまみをつける。かえり部分が大きいことから、壺の蓋であろう。口径 11.4cm。蓋 (38) は、隅丸長方形を呈する特異な器形。天井部外面はヘラケズリ調整。側面はヨコナデ調整で、天井部との境はヘラケズリで面取りをする。内面はヘラケズリ調整の後、ナデ調整を施す。長辺 24.5cm、短辺 17.1cm。器高 5.6cm。なお、同工による折敷形の方形盤が、飛鳥寺南方遺跡 (奈文研『飛鳥寺南方遺跡発掘調査報告』1995 年) でも出土している。38 はこのよう

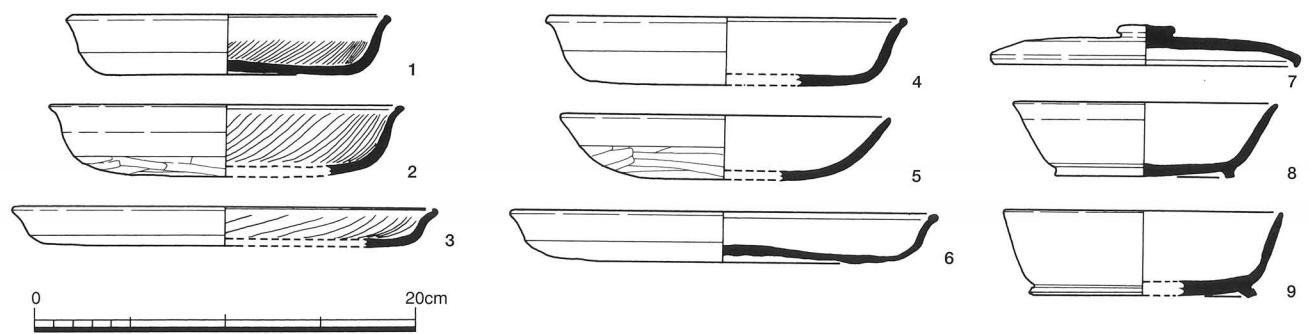


Fig.24 瓦窯関係遺構出土土器 1:4

な折敷形の方形盤に被ると思われる。また、図示はできないが、土師器でも類似した盤の破片が出土している。他の土師器とは異なり、明茶色で、砂粒を多く含む胎土。飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層から出土した盤（『藤原概報22』）に似たものだろう。

ロクロ土師器は、いずれも精良な胎土を用いて丁寧に調整するが、酸化炎焼成で橙褐色を呈し軟質である。蓋(39)は、丸い天井部に大ぶりのつまみがつき、かえりは口縁端部より下方に突出する。口径18.0cm、器高5.3cm。台付碗もしくは杯Bの祖型とされる器に被る蓋であろう。杯B蓋は、口縁端部のかえりがない。大官大寺下層土坑SK121出土のロクロ土師器杯B蓋には、かえりのあるものとないものがあり、本例は後者に属する。

SX650出土土器は、土師器・須恵器双方に見られる杯X・蓋Xや、カキメ調整を施した大型の蓋(27)、隅丸長方形の盤(38)など、非常に特徴的な様相をもち、編年的な位置付けは困難である。ただ、須恵器杯G蓋は、つまみの形態にバラエティーがあり、28・29のような新しい様相も見られるが、かえりの先端が口縁より下方に突出することから、飛鳥Ⅰの様相が強い。ただし、大半を占める土師器・須恵器の杯X・蓋Xについては、より良好な資料を待つて検討したい。

D 瓦窯関係遺構出土土器 (Fig.24)

瓦窯SY595に直接伴う土器はなく、土器から瓦窯の操業時期を知ることはできない。したがって、SY595操業停止後の堆積土から出土した土器(7~9)と、瓦溜りSX594から出土した土器(1~6)について概述する。なお、両者の土器に内容の差は見られない。

土師器は杯A・杯C・杯H・皿A・高杯・甕・ミニチュア炊飯具などが、須恵器は杯B・同蓋・杯H・鉢・

壺・平瓶・甕などが出土している。

土師器杯AⅠは、暗文のないもの(4)、一段放射暗文をもつもの(1・2)がある。いずれもb0手法。1の暗文は口縁部中程で終わっている。口径17.0~19.0cm、器高3.2~3.6cm。杯CⅠ(6)はb手法。摩滅が激しい。口径17.4cm、器高3.4cm。皿AⅠは、放射暗文をもつもの(3)と、もないもの(6)がある。口径22.0cm、器高2.1~2.7cm。

須恵器杯B(8・9)は器壁が厚く、低い高台が底部外周寄りにつく。高台だけではなく底の中心部分でも接地する。口径13.9~14.4cm、器高3.9~4.4cm。杯B蓋(7)は、扁平なつまみをつける。口径16.2cm、器高2.1cm。平瓶は肩が強く張る奈良時代の器形をもつ。

以上の土器は、土師器杯Aの暗文が6・7のように一段放射暗文のみで、二段放射暗文や口縁部の連弧暗文をもたないことや、口縁端部を大きく巻き込み肥厚させること、暗文をもたないものがあることから、平城宮土器Ⅲに比定できる。

E 古墳時代の土器 (PL.16)

古墳時代遺構には、堅穴住居SB642、溝SD640、土坑SK641がある。

SB642からは、小片がわずかに出土したのみである。

SD640・SK641からは、多量の土器が出土した。土師器の出土量が須恵器を圧倒する。土師器には杯・高杯・碗・壺・甕・台付甕が、須恵器には杯H・高杯・鉢・甕・甕がある。他に、ロクロ土師器の鉢や、韓式系土器の甕・鉢、製塩土器片も出土している。

土師器高杯の杯部は、口縁端部が内湾しナデを施すものの、端部が外反し外面に放射状のハケ目調整を施すもの、口縁部が外反する大型のものの3種がある。口縁部が内湾するものは、深浅によってさらに2つに分かれる。甕

は、体部内面の上半までヘラケズリし、体部内面にナデ、外面にナナメハケを施すものが多数ある。また、大型品も少ない。

須恵器杯Hは、口縁部の立ち上がりが直立気味で、端部に内傾する面をもつものと、口縁部が緩やかに立ち上がり、端部に面をもたないものがある。個体数は後者の方が多い。後者には底部を手持ちケズリするものが1点あるが、それ以外はロクロナデ調整。甕は口縁部付近に断面三角形の凸線のある中型甕C類。外面に細い平行タタキを施し、内面は同心円の当て具痕を磨り消す。

ロクロ土師器の鉢は、口縁部をやや斜めに立ち上げ、上方で外反させる。端部には鈍い段をつけ、底部はヘラ切りのまま。

これらの特徴から、両遺構から出土した土器は、陶邑編年TK23～47のものが大勢を占める。したがって、5世紀末～6世紀初頭にその年代を求められよう。

F その他の土器・土製品

工房に関わる被熱土器・漆附着土器・土馬・製塩土器・施釉陶器・埴輪などがある。

被熱土器 ここでいう被熱土器とは、煮沸などに伴う二次的被熱とは異なり、金属加工に伴い高熱を受けたため変色、変形したものや、スラグ飛沫の付着したものを指す。工房テラスやその上面の整地土、工房廃棄物層を中心に出土した。土師器は全体の3割程度で、杯Hが多い。須恵器は飛鳥Ⅱ・Ⅲの杯Gが多く、それ以降の時期のものは確認できない。杯以外の器種では、土師器甕の体部片などがわずかに見られる。飛鳥池遺跡で出土している、片口をつけるなどした専用器はない。とりべや埴輪などに転用され、工房で使用されたと思われるが、小片が多く具体的な使用方法は不明である。

漆附着土器 126点。調査区全域から出土した。8割は須恵器が占める。器種別では、壺・平瓶などの運搬具が半数を占め、杯・皿・杯蓋などのパレット類は約30点、甕などの貯蔵具は約25片ある。小破片が多く、時期の限定は困難だが、飛鳥Ⅱ～Ⅲの須恵器杯G蓋や、飛鳥Ⅳ～Ⅴおよび平城宮土器Ⅲの土師器杯Aなどが確認される。

土馬 3点ある。床土から右前足、中世の包含層から頸部、小柱穴から尾部の破片が出土した。

製塩土器 調査区全域の各層から出土した。特に古墳時

代の溝SD640と、溝を壊して造られた鑄造土坑SX599やSB588の柱穴より、多量の細片が出土した。厚さは1mm程度で内面をヨコナデし、外面には指頭圧痕が残る。外面にタタキを残すものも僅かにある。5世紀後半代～6世紀初めに比定される。また、中世の包含層や溝SD581から、砲弾形を呈する奈良・平安時代の製塩土器も少量出土した。大半が体部片で、砂粒を多量に含む。内面はヨコナデし、外面には指頭圧痕が残る。布目痕を残すものはない。口縁部は3点のみある。端部は、丸くおさめるものと外面に面をもつものがある。古墳時代と奈良・平安時代製塩土器は、その形態的特徴から、多くが紀淡海峡を中心とした地域から運ばれたと考えられる。

施釉陶器 白磁と青磁が4点ずつある。床土および包含層、中世の整地層からの出土。白磁はすべて碗の小片。青磁は越州窯系の碗が1点、龍泉窯系の碗が3点ある。

埴輪 南側工房群の堆積層中から家形埴輪屋根部の破片が1点出土した。窖窯焼成で、外面には押縁を表現した突帯が見られる。

6 その他

工房テラス上から玳瑁片が、区画溝SD605から漆塊がそれぞれ出土している。また、古墳時代の遺構SD640・SK641から滑石製模造品・白玉、碧玉製管玉、砥石が出土した(Fig.25)。滑石製模造品は、勾玉型石製品1点、有孔円盤2点がある。白玉は100点以上ある。



Fig.25 滑石製模造品と玉類